

令和2年度 第2回医療系フォーラム実験小委員会 議事概要

- I. 日 時： 令和2年10月22日（木） 17:00～19:00
- II. 場 所： 公益社団法人 私立大学情報教育協会
- II. 出席者： 片岡主査、神原委員、廣井委員、三浦委員、原島委員、山元委員、小原委員、中山委員、二瓶委員、川島委員、中村アドバイザー、井端事務局長、森下

III. 資料

- ① 2020年度フォーラム実験小委員会の活動計画について（事務局メモ）再掲
- ② 2021年度に向けた実験授業のテーマについて（神原委員メモ）
- ③ 2021年度に向けた実験授業のテーマについて（廣井委員メモ）
- ④ 2021年度に向けた実験授業のテーマについて（小原委員メモ）
- ⑥ 参考資料1「オンライン診療普及へ環境整備」日本経済新聞 2020.10.18
- ⑦ 参考資料2「オデジタル薬-患者癒やす-」日本経済新聞 2020.10.19
- ⑧ 参考資料3「オンライン診療 解禁で溝」日本経済新聞 2020.10.22
- ⑨ 参考資料4「AIで社会課題解決」日本経済新聞 2020.10.21
- ⑩ 令和元年度第1回委員会議事概要

IV. 議事概要

1. 2021年度に向けた実験授業のテーマについて

第1回委員会の議事概要及び資料①の 2020年度フォーラム実験小委員会の活動計画について（事務局メモ）再掲で以下を確認した。

(1) 第1回委員会で検討した実験授業のテーマ、考え方について

- ① 2018年度の低学年対象の実験授業の結果を踏まえて、高学年（4年生）対象の実験授業では、自分たちで課題発見、解決策を考えさせる中で批判的な思考力を身に付けられるようにする。
- ② 授業は多分野連携型のPBL授業とし、社会が大きく変化しており、今までの常識が通用しない、エビデンスが未だないコロナの問題、ニューノーマル、Withコロナなどの社会の変化に伴う解の無い課題を学生が真剣に考え、ウイズコロナの時代に自分たちの分野はどうすべきか、ウイズコロナ時代の健康寿命の延伸などを自分たちで考えさせ、自分なりの解決策を考えさせることを通じてクリティカルシンキングの能力向上を目指す。
- ③ 「問題の設定と解決」に取り組む問題基盤学修（PBL）を行ない、今回のテーマ「コロナ後を見据えた高齢者の健康寿命」においては、学生に問題発見と課題整理、力を合わせて解決を考えさせる部分を作る必要がある。
- ④ 医療を取り巻く環境は「命を守る」から「健康を守る」、「生活を守る」に大きく変化しており、エビデンスがまだ無く、今までの常識が通用しない時代に入っている。このような社会の変化を捉える中で解の無い課題をPBLで考えさせたい。

(2) 第1回委員会で検討したテーマ、考え方についての問題・課題

- ① 医学・歯学・薬学・看護学・リハビリテーション学・栄養学・社会福祉学に加えて法学、政治学、経済学、工学分野なども加えた形で考える必要がある。
- ② コロナ後を見据えた高齢者の健康寿命のテーマで問題発見・課題設定・課題解決をどうやらせるか。テーマと内容を絞り込まないと「問題発見・課題設定・課題解決」ができず学生の達成感は得られない。また、各分野の学生が力を合わせて「解決策を考えるテーマ」でないと学生の積極的な参加、発言、達成感が得られない。

- ③ このテーマでシナリオや場面をどう設定するのか。今起きている問題をそのまま出して学生にピックアップさせて考えさせることができるか。
- ④ 狙いは「PBL でクリティカルシンキング」であるが、4～5回の授業でどこまでできるのか。目標を明確に絞り込まないと、抽象的な議論に留まり、クリティカルシンキングには至らない。
- ⑤ このテーマでは、各分野の学生が「コロナ後の健康寿命」という社会課題にどう立ち向かうか、どうしたら良いかを考えることはできるが、考えを共有することに留まり、力を合わせて解決策を考えることまで行かないのではないか。
- ⑥ 問題点を絞り込まないとプロブレムは挙げられるが「解決策を考える」ことまで行かずに問題点の共有に留まり、批判的な吟味に至らず、一般的な解決策の共有で終わってしまうのではないか。よほど工夫して、栄養、福祉などの分野に展開しないと4～5回の授業という限られた時間ではクリティカルシンキングまで到達することは難しいと思う。

(3) 第1回委員会で検討した実験授業のテーマ、考え方の検討について

仮題「コロナ後を見据えた高齢者の健康寿命」では、具体的にするため高齢者を入れたが、狙いはコロナ後の自分たちの健康を真剣に考えることであるので、「ウイズコロナの時代に自分たちの分野はどうすべきか」、「ウイズコロナ時代の健康寿命を考える」などウイズコロナ時代の健康寿命を自分たちで考えるに変えることも含めてテーマ、考え方、方法などについて各委員に考えていただき改めて検討を進めることにした。

2. 実験授業のテーマについて (委員からの提案)

第1回委員会での検討を踏まえて、第2回委員会に向けて各委員から提案(メモ)をお願いし、提出された各委員から提案(メモ)について検討を行った。

(1) 神原委員からの提案

COVID-19の第2波、第3波が各国で報告されるように、収束の兆しが見えない。そのため、社会、経済、医療、教育など社会活動が制限され、大学も同様にリモート教育が中心となり、これまでの大学教育とは全く異なる状況になってきている。この新たな学習環境は今後とも継続すると考えられることから、教員および学生ともに大学での学びを考え直す良い機会ととらえる必要がある。これはまさしく、自分で問題を発見し解決するPBLそのものであり、After Coronaに到来するであろう新たな世の中、すなわち新たな問題とこの問題の解決策が存在しないことに対応できる学生に教育していく必要がある。このことは、コロナ前から大学の課題として言われていたことであることから、教育改革のスピードが速くなったことを意味することにもなる。そこで、健康関連分野(医学、歯学、薬学、栄養学、看護学、福祉学)連携教育の実験授業のテーマとして、以下のものを考えてみた。

1. WC (With corona) およびAC (After corona) におけるNew Health Normal を考える。
コロナ禍、感染症を防ぎ、予防する日常生活における新しい生活様式 (New Health Normal) を、それぞれの分野で、人々、専門家および地域の視点から、考えることを目的とする。
2. コロナ禍のSDGs (教育、医療・健康) を考える。
3. DX (デジタルフォーメーション) を医療・健康分野にどのように導入できるか。
4. COVID-19の正体を知り、どう対策するか。
5. After Coronaの日本の医療システムの改革を考える。

(2) 廣井委員からの提案

- ① 授業の中で「他職種の専門性と業務について知ること、他職種と自分の専門との関わりについて考える」ことは重要。
- ② 「患者を中心とした医療のなかでそれぞれの職種がどのように関与し、協調していくかを理解する素地となる」。
- ③ その中で「相手が何を求めているかを考える」ことができ、医療チームを作るうえで独善的にならないような経験を積めるような仕組みもあるとよい。
- ④ 課題のベースとなる事例は、参加学生が臨床・臨地実習中とすると入院患者のほうが関わりやすいかもしれない。
- ⑤ 臨場感を作るためにVRの活用はどうだろうか。

(3) 小原委員からの提案

- ①事務局から提示されたテーマである「コロナ後を見据えた高齢者の健康寿命」であるが、授業形態に関しては、基本的には問題発見・課題解決型教育である「PBL 授業」を進めることは確認したい。
- ②医療保健福祉領域、多職種連携を見据えた授業計画を立てる方が良いと思う。その上で、患者の支援計画をミクロから多角的に検討することや、ミクロから得られた知見を活用して、コロナ後を見据えた地域・社会の高齢者の健康寿命のための検討に移行することにより、ミクロ・メゾ・マクロと広がりを持った学びができないかと思う。
- ③医療系の学生は、臨床での実習などで多忙であり、特に高学年になると国家試験などを控えており、限られた時間で実施する上で無理があるかもしれないのでインセンティブなどの工夫が必要と思う。その意味において、どこに焦点化するのがははっきりさせる必要がある。
- ④特にPBL 授業の場合は、実際のコロナ禍にある高齢者の実態を含めた事例をビデオなどで作成し、学生に視聴することにより、具体的に各領域からの実践方法を検討することが可能かと思うがこのようなことが可能かどうか。
- ⑤特に、メゾ・マクロレベルでの検討の時には、法政策系の分野のフォーラム型授業モデルが活用できないか、アイデアが欲しい。多面的・多角的な情報を活用できるように、専門家などと知識の交流ができるといいかもしれない。

(4) 欠席の川島委員から以下の提案をいただいた

多分野を活かした取り組みとする場合、with コロナ、ポスト・コロナが重要な分野横断のカギとなると思うが、医療福祉の「高齢者の健康寿命」など、中々、高齢者に傾斜すると若者には難しいと思う。広めにとって「with コロナ、ポスト・コロナによるニュー・ノーマルとは何か」という切り口で、もう少し主題を絞るといのはどうだろうか。

ニュー・ノーマルが必要な理由は専ら、医療系の防疫の観点からなので、これなら医療系と非医療系の分野横断も組めるのではないかと思う。例えば、接触型対面コミュニケーションに対し、配慮しなければならないことが沢山あり、学生の間では、もう、どうやって恋愛をすればよいのかなどマナーも、相手への感染を配慮した所作が求められるようになっており、これには高齢者や持病を持つ感染弱者への配慮も含まれる。

また、コロナ差別や陽性反応の隠ぺい問題、感染リスクの高い職業(=医療系など)の問題やこの防疫手段は本当に効果あるのか、流言飛語的なものや、医療のリテラシーなども良い話題と思う。コロナの問題は現在進行形で未知の多い話なので、無理にソリューション志向でプログラムを設定してみても難しいと思いが、ニュー・ノーマルのコミュニケーションや、非接触

型と接触型のハイブリッドの在り方など、様々な課題のリスト提示ということ、多分野の学生目線の議論からリスト作成してみることも考えられる。

臨床系の教育などは負担が大きいと思うので、少し、専門性が薄まった話ではあるが、多分野の学生による日常生活／社会生活から考えてみたニューノーマル・課題リスト作成ということなどはどうだろうか。

(5) 片岡主査からの提案

以上のような提案、意見の後に片岡主査から「2021年度の実験に向けた高学年を対象とした授業デザインについて」以下の提案が行われた。

(1) 実験授業の目標

高学年を対象とした授業では、健康長寿社会を実現するために、コロナ禍における地域の高齢者の事例について多分野の学生とディスカッションを行い、複数の視点から問題を発見し、それぞれが連携して問題解決策を提案する。提案後、有識者によるリソース講義などを聞いて視野を広げ、最新情報を取り入れて、問題解決策のさらなる改善を図る。さらにコロナ禍における健康寿命の延伸を図るために、事例を取り巻く地域社会に対する提言を行う。

(2) 授業で獲得する能力

PBL(Problem Based Learning)の学修プロセスに則って授業を行うことで、以下の能力を身につけることができる。

- ① 事例の全体像を把握した上で、多分野の視点で問題を発見できる。
- ② 与えられた情報を鵜呑みにせず、複数の視点から問題を検討できる。
- ③ 問題解決のために、エビデンスの高い適切な情報を活用できる。
- ④ いくつかの可能性を検討した上で、優先順位を考慮した解決策を提案できる。
- ⑤ 自分の意見をわかりやすく他者に伝え、他者の意見を傾聴し、積極的に効果的なグループ討議ができる。
- ⑥ 問題解決のプロセスとその結果について、論理的にわかりやすくレポートを書ける。
- ⑦ 上記の能力に関する適切な自己評価を行い、さらに改善する方法を模索できる。

(3) 授業の形態

- ① 多分野・複数大学からなるグループでネット授業を行う。

医学、歯学、薬学、看護、福祉介護、栄養学分野などの4年生（医歯薬は4、5、6年生）が6名程度のグループを形成し、Webシステムを活用して分野横断型PBLを実施する。

- ② ネット授業は、自己主導型学修とグループ学修とする。

オリエンテーション後、5回のネット授業を実施する。学修課題は学生が決定し、ネット授業の間隔（最低1週間）に自己主導型学修を実施する。1回のネット授業は90分から2時間程度とし、毎回ファシリテーターとともに振り返りを行う。授業終了後はポートフォリオによる振り返りと本授業で学んだ内容（問題解決のプロセスなど）を各自レポートにまとめる。

- ③ PBL学修のプロセスに則り、学生が学びをマネジメントして、ファシリテーターはそれをサポートする。

(4) 事例の選定

「コロナ後を見据えた高齢者の健康寿命の延伸」をテーマとして、医学・歯学・薬学・看護学・栄養学・社会福祉学（リハビリテーション学、法学、政治学分野）の専門家が協働して、コロナ禍における地域の高齢者の事例*を作成する。その際に地域の取り組みまで検討させる方策として以下の2つの案に沿って検討する。

A 案：個別事例→地域事例（地域の取組を含む）

B 案：地域の取組の中の個別事例→地域の取組の改善策

※ コロナ禍における以下のような背景を事例に含める。高齢者は感染を恐れて外出を控える。近所づきあいも以前は盛んであったが、最近は疎遠になっている。近くの商店街では閉店が相次ぎ、買い物ますます不便になり、医療機関の受診もなるべく控えている。以前は孫がよく遊びに来ていたが、最近は全く顔をみていない。B 案では柏モデルのような取組を行っている地域に住む高齢者事例をシナリオで取り上げ、「コロナ禍での地域のフレイル予防などの取組の縮小」を問題として抽出させ、そこからコロナ後を見据えた取組を学生に考えさせる。

(5) ネット授業の進め方

PBL の学修プロセスに沿って、以下のようにネット授業を進める。

- ① 事前準備 オリエンテーション、分野連携型 PBL の目的を説明する。
- ② ネット授業 1 高齢者の事例提示 問題について討議し、問題を整理する。
- ③ ネット授業 2 解決策（仮）を考えて学修課題を決める。
- ④ 自己主導型学修 1 エビデンスに基づいて、学修課題について学修成果を整理する。
- ⑤ ネット授業 3 学修成果を共有し、既存の知識と新しい知識の統合を図る。グループで高齢者の事例に対する解決策を決定する。
- ⑥ 自己主導型学修 2 グループで決定した高齢者事例の解決策を説明する準備を行う。
- ⑦ ネット授業 4 グループで決定した高齢者事例の解決策を説明する。
- ⑧ リソース講義 高齢者事例について理解を深めると同時に社会的対応について考えさせるための講義を多分野の教員、有識者が行う。
- ⑨ ネット授業 5 高齢者事例への解決策と社会的対応について説明する。
- ⑩ 自己主導型学修 3 高齢者事例の問題発見と解決策、社会的対応について、PBL で学んだ内容を含めて、専門の立場からレポートにまとめる。
- ⑪ 振り返り PBL における学修について省察を行う。

(6) 検討を要する点

- ① 大学、学部が異なり、対面したことがない学生間で、お互いの専門領域の垣根を超えた活発な討議を行うためには、ネット授業開始前にしっかりとアイスブレイキングをする必要がある。
- ② ファシリテーターのトレーニングとガイドの作成
オンライン上で分野横断型 PBL を行うには、対面型以上にファシリテーターのスキルが必要になる。また、議論を活性化するための工夫も求められる。
- ③ 学生の視野を広げ、理解を深めるための有識者などによるリソース講義
既存の知識の範囲や深さおよび視点が異なる様々な分野の学生たちが、ファシリテーターの支援の下で自らの学びをマネジメントをしながら、グループの力を結集してグループプロダクト（問題解決策）を作成して、それを説明する。その際に学生たちの視野を広げ、理解を深めるために有識者のリソース講義を行う。リソース講義はフォーマルなもの以外に、Web の掲示板への書き込みやチャットの活用なども検討する。学生たちの学びのマネジメントやファシリテーターの支援を妨げなければ、Web の掲示板への書き込みやチャットの活用をプロダクト作成前に実施することも可能であると考えられる。
- ④ 社会の状況を反映した事例の選定
例えば、すでにフレイル対策などの取組を行っている地域の高齢者の事例を取り上げて、コロナ禍における影響やコロナ後に向けた地域の取組なども学生に考えさせる工夫をする。

3. 事務局からの提案

事務局から本年度は新型コロナウイルス感染防止のため、本年度の「分野連携りアクティブ・ラーニング対話集会は理事会及び学系別委員会の検討を踏まえて開催を中止する方向であり、2021年1月の医療系分野の対話集会で報告は行わないこと。また、現在の状況では2021年度も感染状況の急な改善の見通しが立たないことから実験授業を1年間延期し、2022年度に向けて時間をかけて検討することが提案され了承された。

4. 今後の進め方について

本年度独自に実験的授業を実施された経験を踏まえ、提案いただいた片岡主査の「授業デザイン(案)」を基本にして、今後検討を進め、2022年度の実験に向けて授業デザインの検討を進めることにし、以下の内容を確認した。

- ① 参加学生の視野を広げるため、法学グループの事例などを参考にして、最終段階のリソース講義などで有識者の意見を入れて学生に刺激を与える。また、法学(中村委員)、メディア・コミュニケーション(川島委員)の学生に異なる視点の学生の意見を入れてもらうことで刺激を与える方法などを検討する。
- ② 第一段階を経験した学生を対象に第2段階を実施することができないので、初めてこのような授業に参加する学生の議論が活性化する工夫(ブレークスルーやファシリテート)の仕組みを工夫する。
- ③ リハビリテーションの学生が参加できるよう事務局として参加を呼びかけるが、リハビリテーション分野は今までの議論に参加していないため、新規の参加が難しい場合は従来の6分野で行う。

5. 次回の委員会

次回委員会は、各委員のご都合をお聞きし12月をめどに日程調整することにし、日程調整の結果、12月23日(木)15:00~17:00に決定した。